

日本文体論学会
第 116 回大会（ヴァーチャル カンファレンス）
プログラム

2020 年 6 月 13 日（土）～6 月 20 日（土）

日本文体論学会

日本文体論学会会員の皆様

新型コロナウイルス感染症が世界中で大きな猛威を振るい、私たちの日常生活が一変してしまいました。日本国内で開催される多くの学会が中止や延期となりました。本学会も、本来でしたら、当初6月13日、14日に福岡女学院大学で開催をし、そこでご挨拶をさせていただくことになっておりましたが、紙面にてご挨拶させていただきます。

日本文体論学会第116回大会の開催に向けて、常任理事の先生方や運営委員の先生方、開催校の担当の先生と何度も協議を繰り返してきました。現在、私たちの置かれている状況を鑑み、様々な場所から人々が一堂に集う形式での学会の開催を断念することとなりました。しかしながら、第116回大会をインターネットを活用したオンライン形式で開催するためのプラットフォームを準備することに間に合いましたため、ヴァーチャルカンファレンスとして開催するに至りました。学会のサイトに動画を一定期間アップしますので、その動画をご覧になった後に掲示板にて発表者に質問をすることができる仕組みとなっております。通常とは異なる方法による大会となるため、不慣れな会員の方々もいらっしゃる、ご不便をおかけしますが、奮ってご参加ください。今回は研究発表のみとし、本学会会員のみ配信いたします。なお、総会もオンラインにて開催いたします。そのため、指定されている時間にアクセスしていただき、議決にご協力ください。

【動画配信期間】 2020年6月13日(土) 12:00AM ~ 6月20日(土) 12:00PM
(配信時間は日本標準時となっております)

【動画の視聴方法】

- (1) URL にアクセスしてください。
- (2) ユーザーID とパスワードを入力してください。
- (3) 氏名、メールアドレスを入力してください。
- (4) 発表者に質問がある場合は、掲示板から書き込みをお願いします。掲示板に書き込むことで、質問事項が掲示板に書き込まれると同時に発表者にメールが自動的に送信されます。

また、質問者がログイン時にご自分のメールアドレスを入力し、「質疑時にメールでの返信が必要な場合チェックを」にチェックしておきますと、発表者が掲示板に書き込むと同時に質問者に自動的にメールが届きます。なお、発表者への質問は6月27日(土) 12:00AM までとします。

【総会】

6月13日(土) にオンラインによる総会を開催いたします。

オンラインの総会は6月13日の11時から15時の間に以下のサイトにアクセスしていただきます。

<http://www.japanstylistics.org/index.php> ※「総会ログイン」からログインしてください。

そのページに、各種会員の皆様にご承認いただきたい事項が掲出されておりますため、承認または未承認(その場合にはご意見を記入していただくことになります)の欄にチェックを入れていただきます。大変恐縮ではございますが、学会の運営上重要な案件がございますため、オンラインの総会での議決にご協力願います。

研究発表タイトルおよび要旨

「独英存在表現の文体比較：テキスト内の結束性に着目して」

大喜 祐太（三重大学；ドイツ語）

本研究の目的は、ドイツ語と英語の存在表現の用法を比較することを通じて、両言語の非人称構文における文体的特徴を明らかにすることである。本発表では、まず英語やドイツ語の存在表現に関する先行研究を概観した上で、COSMAS II や DWDS などのドイツ語コーパスもしくはインターネット上から抽出した用例を観察することによって、両言語の存在表現の特徴を吟味する。「～がいる、ある」ということを表現する非人称構文について、英語の *there is* とドイツ語の *es gibt* (*Eng. it gives*) は用法の類似を指摘されることが多いが、とりわけ、実主語・場所的副詞句の特徴（指示性や省略）、存在的メタファー、語順などの観点から英独存在表現を考察すると、両構文の意味が単純には交換できないということがわかる。具体的に言えば、英語の *there is* 構文が談話への実主語の導入のために使用されることが多いのに対して、ドイツ語の *es gibt* 構文は、そうした導入表現としてだけでなく、指示性の高い実主語を伴う場合、前文との結びつきの強い表現としても使用されることが指摘できる。今後は、標準ドイツ語や英語のみを対象とするだけでなく、方言や周辺言語との比較や対照を通じて方言間の揺れや言語接触の可能性を模索することによって、各方言・言語間にある相違や共通点を見出し、存在表現の本質を明らかにしていきたい。

「X is the new Y, X is the new black, そして orange is the new black —社会変動をベースとするメトニミー拡張—」

友繁 有輝（大阪大学大学院；英語）

本発表は、X is the new Y から展開される X is the new black 及びに orange is the new black について、その意味と用法を考察した上で、その発展の原因を探る。研究手法として、Corpus of Contemporary American English (COCA) のデータから各表現のジャンルを特定し、データの出典（新聞記事、本、スピーチ）を参照した上で、この構文の特徴を検討していく。

本発表では、次の3点を主張する。(i) X is the new Y のスキーマ (Antonopoulou & Nikiforidou 2011; Fillmore 1988; Goldberg 1995, 2019; Hoffmann & Trousdale 2013; Lakoff 1987) は、自由度の高いスロットではあるが、傾向として社会的要因 (Fairclough 2001; Halliday 1978) が原動力となる<変化> (中村 2019) が核となり、文脈に応じて X がメトニミーとしてはたらく。(ii) X is the new black の X には、プロトタイプとして色彩語が代入され、ファッションの分野で使用される傾向がある。(iii) orange is the new black は、(ii) をプロトタイプとするが、社会変動をベースとして X と Y がメトニミー拡張することで、メタファーとしても機能する。

本発表では、データが COCA に限定されていたため、今後は他のコーパスを使用してデータを収集していくことが課題である。

日本文体論学会 事務局

〒206-0033

東京都多摩市落合 2-6-1 (株) インフォテック内

電話 : 042-311-3355 Fax : 042-311-3356 E-mail : buntairon-post@infotec.co.jp